

2009年9月28日

アルツハイマー早期発見に道

## 脳の画像診断用薬剤 滋賀医大

滋賀医科大学の遠山育夫教授と田口弘康特任教授は、アルツハイマー病の早期発見に役立つ脳画像診断用薬剤を発見した。ウコンを参考に作った化合物で、病気の原因となるアミロイドベータたんぱく質の中でも、特に脳神経への毒性が強いとされる塊状のタイプと結合する。製薬会社と組み、磁気共鳴画像装置（MRI）向けなどに実用化を目指す。

滋賀県工業技術総合センターなどとの研究成果。物忘れや徘徊（はいかい）などが起こるアルツハイマー病は、アミロイドベータたんぱく質が脳内に蓄積し発症する。

開発した化合物は分子構造が異なる2タイプが存在し、互いに形が変わる。アミロイドベータの塊と結合するのはこのうちの1種類で、結合すると赤く光る。塊状になっていないアミロイドベーターとは反応しない。

マウスの静脈にこの化合物を投与すると脳に届き、MRI検査の診断薬として使えることを確認した。安全性も高いという。今後は大型動物などを使って性能を詳しく調べる予定だ。

アルツハイマー病の画像診断は、陽電子放射断層撮影装置（PET）などで試みられているが、早期診断の方法は未確立。開発した化合物を使手法は毒性の高い塊の量が詳しく分かるので早期診断に役立つ。血液や脳脊髄（せきずい）液を採取し体外で診断するのにも将来使えるという。

アルツハイマー病の国内患者は150万人を超える。アミロイドベータは発病の10年以上前から脳に蓄積するので、早期に発見して治療を始めれば進行を遅らせることも可能になる。

＝日経新聞＝